

フランス語の否定文というのは、ちょっと特殊な形をしています。なぜなら、否定文の動詞を "**ne**" と "**pas**" という、2つの単語で挟まなくてはならないからです。

わざわざ挟む必要がないように思えるけど…

日本の義務教育を受けている人であれば、一番なじみ深い外国語といえば英語でしょう。英語の否定文の場合には、否定を示す単語は1つ、つまり "**not**" を使います。

**I am not a student.**

**be** 動詞（この場合は一人称単数につくため "**am**" に活用）のすぐ後に **not** が置かれます。

では、フランス語の兄弟分（同じラテン語を母体としている）のスペイン語やイタリア語などではどうでしょうか。どちらも同じようなものなので、簡単にスペイン語を例に挙げます。

**Yo no soy estudiante.**

**ser** 動詞（この場合は一人称単数につくため "**soy**" に活用）のすぐ前に **no** が置かれます。

つまり、英語も、フランス語の兄弟分たちも、否定を表す単語は前後どちらかに一つだけで十分なのです。一方、フランス語では動詞を **ne ~ pas** で挟むことによって否定文が完成します。

**Je ne suis pas étudiant.**

前に紹介した2つの言語の例文よりも、一気にカラフルな印象になりましたね(笑)

パッと見た感じ、なんだか面倒くさい文構造のフランス語。いったい、どうしてこんなことになってしまったのでしょうか。

**基本は ne が否定の意**

昔のフランス語、つまりラテン語の性質が今よりも多くの残っていた時代のフランス語は、音もラテン語のようにはっきりしたものでした。現在、私たちが思うような情緒的印象はなく、もっとしっかりと発音される言語であったようです。その時代では、否定を表す単語は **ne** の一つだけでした。これを「ネ」もしくはアクセントをつけて「ネー」と発音されていたようで、しっかり聞き取れていたんですね。しかし、時代を下がるにつれて、フランス語の発音は、独特のボソボソとした不明瞭なものになってゆき、**ne** も「ヌ」の音になりました。

すると、今までは聞き取れていたはずの **ne** が、速く話したり周りが騒々しいと聞き落してしまうといったような困ったケースが続発！そこで、フランス人は新しく動詞の後にも聞き取りやすい **pas** 「パ」を加えて、この文章は否定文ですよ～というのを強調し始めたのです。これが、サンドウィッチ構造の始まりです。

**pas の原義**

**pas** って、否定文を作るときに登場してくる単語ですが、同じ形で **pas** 「一歩」というものがありま

すよね。これは単なる偶然ではありません。もともと、サンドウィッチ構造が生まれるよりも前から、**ne** と **pas** を組み合わせる技法は存在してたのです。例えば、**Je ne marche pas.** 「一歩も歩かない」  
一歩もという強調表現ですね。他にも、、、**Je ne bois goutte.** 「一滴も飲まない」(**goutte** 「滴」の意から) **Je ne mange mie.** 「少しも食べない」(**mie** 「パンのかけら、パン屑」の意から。現代では **mie** にあたる言葉は **miette** になっている) などがあります。

このなかで、**ne ~ pas** だけが普遍的に使われるようになり、現在ではすべての否定文に適用されることになったわけです。

英語での意味と語源：**pas** n.1 [パレエ] a パ 《ステップの総称》. b 舞踊, ダンス. 2 ((まれ))[the ~] 優先権, 先行権; 上席. \***petə-**, PIE root meaning "to spread." **petə-** 広げることを表す。

It forms all or part of: **compass; El Paso; expand; expanse; expansion; expansive; fathom; pace** (n.); **paella; pan** (n.); **pandiculation; pas; pass; passe; passim; passacaglia; passage; passenger; passport; paten; patent; patina; petal; spandrel; spawn.** 25 語

## 強調否定について

もうひとつ、おもしろい例をあげましょう。**chose** 「物」はラテン語では "**rem**" というのですが、これが現代フランス語では "**rien**" です。

「言わない」という一般の否定文は **Je ne dis pas.** となりますが、「何も言わない」と強調したい場合は **Je ne dis rien.** と言います。

そうです、勘のいい人なら気づいたかと思いますが、**ne ~ rien** というのは、**ne ~ pas** 以外のサンドウィッチ構造で現代に残っている数少ない例の一つなのです。「**ne ~ rien** 何も物がない」という仕組みなのは、**ne ~ pas** の時と同じですね。

もう少しわかりやすい例だと、**ne ~ personne** がありますね。これは「人がいない」という原義で、「人っ子一人いない」という強調された文章としてとらえることができます。こういった現代に残る強調構文の例は、ほかにも **ne ~ jamais** や **ne ~ guère** などがあるので、少しずつ知識として蓄えてゆくと、作文などを取り組むときに有利になるでしょう。

## ne だけが使われる否定文があるってホント？

聞き取りにくいゆえに、単独で使われることがなくなってしまった **ne**。  
しかし、これが単独で使われるというケースが存在するのです。どこまでややこしいんだ、フランス語…。

**pas** を加えるサンドウィッチ構造以前の形、つまり古い言いまわしをにおわせる言い方ということですね。この技が使える動詞は限られています！

**pouvoir + inf.**                      **cesser de + inf.**                      **oser + inf.**

**savoir(conditionnel) + inf.**

もしくは **savoir + interrogation indirecte**(間接疑問)      (inf.は infinitif の略)

この4つのみ！細かい規則はここで説明しません。なぜなら、使えなくても（**ne** ~ **pas** で書いてしまっても）問題ないことだからです。使えたら、美しいフランス語が使えるというまでのものです。こういうところで、フランス人は対面している人の教養をチェックしているんですね。

### ne の欠落～時代は pas の独壇場～

**ne** が聞き取りにくいという理由で **pas** が加えられたという話をしました。視点を現代に移してみると、もはや **ne** はお払い箱になって **pas** だけが発音されている時代にあるといえます。そうです、巷で話されているフランス語では **ne** が使われていないことが多い（っていうか殆ど）のです！！

例えば、**Je ne sais pas.** は、友達同士で話す場合はまずこの形にはなりません。

**Je sais pas.** になります。（さらに悪化すると、「ジュ・セ・パ」→「シェ・パ」という形骸化した発音になってしまうのです） **Je ne mange pas. Je mange pas. Je n'ai pas vu. は J'ai pas vu.**

しかし、これは **langage familier** といって、口語の場合のみに使える技です。いちいち **ne** を言わなければ話しやすくなりますからね。

書き言葉の場合は **ne** を省略することはありません！作文で **ne** を省略したら減点になってしまうので、気を付けてくださいね。もう少し掘り下げて言うと、**plus** を使った否定文では **ne** は省略しなくてもよいでしょう。次の文章を見比べてください。

**Je mange plus.** 「もっと食べる。」（肯定文）      **Je ne mange plus.** 「これ以上食べない。」（否定文）

（否定文）のほうから **ne** を省略すると、（肯定文）と全く同じ形になり、意味は真逆のことなのに見分けがつかなくなってしまうですね。フランス人は本当に器用なことに、（肯定文）の **plus** を「プリュス」、（否定文）の **plus** を「プリュ」と言い分けて、**ne** を省略しているのですが、これもすべての人に当てはまるというわけではなく、酷くグレーゾーンの広い部分なのです。

なので、私たち外国人は、**plus** を使った否定文章の場合は、わざわざ **ne** を省略する必要は無いと思うんですよ。

### まとめ

フランス語というのは、古くラテン語からの流れをくむ言語で、時代の移り変わりとともに多くの文法が形を変えて現代まで伝わっています。

フランス語の否定文の謎は、本来否定を表していた **ne** が聞き取りにくくなり、その問題を解決するために **pas** という聞き取りやすい単語を加えて動詞をサンドウィッチすることになったのです。

そして、現代では口語体に限り、元来否定語として存在していた **ne** を抹消するという新手の暴挙に出ているわけですが、そこはやはり高貴なフランス語、書き言葉ではこの傍若無人な扱いは認められていません。日本語でも「ゆめゆめ〜じ」で「全く〜しない」という、古文の流れをくむ言い回しがあるのと同じように、フランス語にもちょっと難しい言い方があるんですね。一口に否定文と言っても、歴史の中でフランス語がどのように変わってきたのかを調べてみると、なかなか面白いものです。